# 短編小説「愛子宅訪問」

愛子、喜子、靖夫はともに昭和十六年、巳年生まれの今年還暦を迎える女と男である。
愛子は二月、靖夫は三月。喜子は四月と三人は生まれた月が愛子の二月を筆頭に続いている。
愛子は靖夫の従兄弟直樹の妻であり、喜子は靖夫の妻である。
直樹は大手機械メーカーの設計を担当する技術者として勤めていたが若くして会社を辞め独立した。
直樹は機転と人を飽きさせない天性を持っていた。
又、営業努力と先見性により艱難辛苦の末、やっと従業員を十人程度使い、借金もしただろうが神戸海岸通りより少し岡側に入った所に50坪ほど土地を購入しそこに二階建ての事務所兼倉庫を建築し、神戸港に入港する船舶や造船所に部品や備品、日常雑貨を納入するN商事の社長になっていた。
直樹は靖夫よりも五歳年上でまた直樹には七つ年の離れた弟健がいた。
太平洋戦争前、叔父一家は大阪市内に住んでいたため疎開で実家の和歌山に引っ越して来ていた。
彼らは靖夫の家族と同じ屋敷内の離れに住み、共同生活をしていた。従って直樹と靖夫、健は兄弟のようにして育った。
当時、健は二歳であったため一緒に遊んだ記憶がないが靖夫は常に直樹にくっ付き、紀ノ川でうなぎ取りや鮎釣りに連れて行ってもらった。
この関係は大人になっても続き直樹と靖夫、健は大の仲良しだった。
愛子と直樹との間には真知子と亮という二人の子供がおり、この小説が展開する頃、真知子は結婚しており亮は二十二歳の青年になっていた。
直樹の父、つまり靖夫の叔父英一は平成四年、八十八歳で天寿を全うした。悲しいことに英一の四十九日も済んでいない早春の朝、亮は交通事故のため二十二歳という若さでこの世を去ってしまった。
直樹は自分の後継者として亮に期待をかけていたためその悲しみは傍から見ておれない状態だった。
靖夫は直樹に対してどう慰めていいものか困惑した。
直樹も又最愛の息子亮の跡を追うように翌年（平成五年）の夏、病気のため五十五歳で亡くなってしまった。
悲しい出来事の中にも一つだけ救いがあった。それは直樹が亡くなる一ヶ月前に娘真知子にかわいい男の赤ちゃんが誕生し、直樹はそれを見届けたことである。
後ほどこの赤ちゃんが裕太少年として登場してくるので楽しみにしておいて下さい。

愛子の家は新開地を出発点とする私鉄の沿線S駅から歩いて十五分ほど急な坂を登った高台の静かな住宅地にあった。愛子はそれまで主婦であったが直樹没後N商事を引き継ぎこの家から会社のある海岸通りまで通っていた。

この悲運な愛子に神は更に試練を与えるかのように直樹が亡くなってまだ一年半ほどしか経ていない一九九五年の一月十七日あの神戸淡路大震災によって焼失と全壊は免れたものの浜の事務所兼倉庫は滅茶滅茶に壊され倉庫の商品は廃品同様となり事務所の卓上型パソコンやコピー機は使いものにならない大被害をこうむった。

短期間に三人の男を亡くした急な坂を登った静かな高台の家は愛子と九十一歳になる直樹と健の母親（愛子の義母）春子との二人きりの生活になってしまった。

叔母春子は昼間、愛子が浜の事務所に働きに行くため一人で留守番をする状態であった。

靖夫は出張の帰り道時々さびしがりやの叔母を慰めるため立ち寄り叔母の話し相手をした。

愛子はかねてからこの家に住むのが嫌になっていた。その理由は駅から急な坂を登らなければいけないこと、一九六五年頃、六甲の山塊を切り崩し造成した住宅地のため夏は涼しいが冬の寒さが相当厳しく路面が凍結することもしばしばだった。愛子はそういった自然の制約より一番やるせない気持ちにさせたのは疲れきった体を夫直樹や息子亮の思い出が一杯詰まっている部屋で電灯を切り、一人さびしく床に臥す時だった。真っ暗な部屋で会社のこと、明日からのことを考えていると必然的に直樹や亮のことが思い出され止めどもなく涙が溢れてきた。

かねてから真知子は母愛子やおばあちゃんのことを憂い二世帯住宅で住むことを考えていた。

真知子は夫達夫を説得し愛子は義母春子を説得した。

理解ある達夫は快く賛同してくれたが頑固なおばあちゃんは「私の目の黒いうちはここを離れない」「近所のお友達と別れるのが嫌だ」「住み慣れた所がいい」と駄々をこねた。しかし愛子は粘り強く説得し、ようやく了解してもらった。

さいわい車で高台の家から十五分位行った所に日当たりの良い静かなしかもフラットで交通の便が良い土地が見つかり高台の家を売って昨年の暮れに引っ越して来た。

靖夫と喜子は早く御祝いに行こうと思っていたが延び延びになっていた。二月の初めの暖かい土曜日、靖夫と喜子は一泊して御祝いに行くことにした。

靖夫と喜子は愛子とJR三宮駅中央改札口で待ち合わせすることにした。当日愛子は約束の十六時三〇分に迎えに来てくれた。靖夫と喜子は東京、横浜、仙台と東日本での生活が長く特に愛子と喜子の再会は何十年ぶりかであった。

喜子と愛子は人々が大勢往来する駅構内で靖男や辺りかまわず「おしゃべり」が始まっていた。

神戸を知らない靖夫と喜子のために「ハーバーランドに行かない？」と誘ってくれた。

喜子も靖夫も港が大好きだった。愛子の好意に甘えてうなずいた。

三宮から地下鉄で二駅ほど先の駅で降り、洒落た地下街のお店を見物しながら通り神戸港が眼下に見え六甲の山並みが美しく眺められるホテル最上階の落ち着いたレストランにきた。

愛子は何を食べたいか喜子に尋ねた。喜子はメニュー表を見ながら「懐石料理」と応えた。愛子は「神戸に来たのだから神戸牛も食べていって」といって仲居さんにもう一品「石焼ステーキ」を注文した。

まずビールが運ばれ三人で乾杯した。

靖夫は心の中で従兄弟直樹やその長男亮、叔父英一の冥福とこの三人の仏様に「愛子一家が健康で繁栄することを守って下さい」と祈った。

愛子と喜子には義母春子九十一歳、紀子八十四歳の介護について共通の問題を抱えていた。

ご両人とも長男の嫁、同世代、義母に関する共通の話題があるため良く気が合うらしい。美味しいご馳走を目の前にして二人は義母二人の話に夢中になっていた。

二人は時々靖夫に同意を求めに来た。靖夫はそういう話から逃避したかったが無関心を装う訳にも行かず無言で頷いた。

靖夫は彼女らの話し相手になるより茜色の空から漆黒の闇に移り行く神戸の夜景や黒ずんで見える六甲の山並みを眺めながら直樹と遊んだ幼少の頃、北の新地や十三で遊んだ青春の思い出にふけりたかった。愛子と喜子はあい変らず話しに夢中だった。何もかも忘れ話に夢中になっているときが彼女達にとって一番幸せでストレスの解消になるらしい。

左党の靖夫はお酒を二合頼んだ。仲居さんは上品な赤絵の徳利をお盆に載せて運んできた。本場の生一本だけあって美味しい。器といい、ローケーションといい仲居さんの何気ないサービスといい心憎いばかりの演出である。

食事後三人は観覧車のある遊園地の前を通りメリケン波止

場に出た。埠頭には大きな貨物船が繋がれており夜の潮風に当たっていると何だかロマンチックな気分になった。
愛子は埠頭からの帰り道、明朝の食事は和食にするかパンにするか靖夫に尋ねた。靖夫は和食党であるが神戸に来たのだからパンにするといった。愛子は有名なパン屋の支店に立ち寄りパンを買った。三人は又地下鉄で三宮に戻りガード傍のバスターミナルから市バスに乗り新神戸駅のガードおよび長い長いトンネルをくぐり抜け愛子の家に着いたのは二十一時頃だった。
いつもの習慣で翌朝靖夫は六時に目をさました。叔母はもう起きていた。高齢のため目が覚めるのが早いらしい。他の人はまだ寝静まっているらしい。叔母は私に話しかけてきた。新しい土地に来て友達がいないこと、ハイテック化されたキッチンルームが使い難いこと等々、靖夫はその愚痴を一つ一つ丁寧に聞いてやった。
七時三〇分から毎週見ている「報道二一〇〇」を見ることにした。八時三〇分頃愛子、真知子、喜子が起きてきた。
間もなく三人で楽しそうにおしゃべりしながら朝食の用意が始まった。そのかん高い声がリビングルームに聞こえてくるのでテレビの声が聞き取り難かった。「いい加減にしろ」と怒鳴りたかったが我慢した。十時頃朝食が始まった。
若い夫婦達夫と真知子、少年裕太は二階の小キッチンで朝食を取った。テレビを見ていると午後一時ごろ、柔らかいボールと化学製品のバットでもってリビングルームで打つ遊びをしていた。相手になってやると公園に行って野球をやろうと言い出した。腹減らしと運動のため調度いいと思い彼の誘いに応じた。裕太は二階に上がってお父さんのグラブと自分用の小さなグラブおよび軟式のボール数個入れた青いズックかばんを持って降りて来た。裕太の家から区画整理された住宅地の道を東に三〇〇米ほど上った所に一〇〇〇 m2ほどの公園があった。公園は周囲がつつじや広葉樹の植え込みで真ん中が広場になっていた。公園は私たち二人だけで他に誰もいなかった。裕太は公園に着くなりタイガースのシールを貼ってある黄色いバット、グラブ、ボールを見せて「お父さんにトイララスで買ってもらったんだ」と嬉しそうにいった。落ちていた小枝でもって地面に一塁側、三塁側両側とも外野までラインを引きそれから左右のバッターボックス、ホームベース、一塁ベース、二塁ベース、三塁ベースと得点表を書いた。彼は大好きな阪神タイガースになり、私は仕方なく敵役の読売ジャイアンツになって戦うことになった。裕太少年はまだ一年生で正しいバットの握り方やルールを知らなかった。靖夫は丁寧に教えてやった。裕太の父達夫は大手電気メーカーに勤める三十七歳の青年である。最も油の乗り切った働き盛りである。成果主義、実力を重視する今日、休日で

も相当勉強しているらしい。子供にかまってやりたくとも余りかまってやれない境遇であろうと靖夫は勝手な想像をした。

九回まで戦うつもりでいたがあまりにも運動量が激しいため途中、五回で終わるよう裕太に乞うた。裕太は了解してくれた。裕太にはルール通り3アウトになるまで攻撃の機会を与え靖夫の攻撃は一回アウトになるとチェンジするハンデで試合を行った。靖夫にとってその方が都合が良かった。二人だけの野球であるから三振でアウトにするか打ったボールを取ってから一塁ベースに駆け込むまでにタッチしてアウトにするか裕太が二塁ベースや三塁ベースを欲張ってその途中でアウトにするしか方法はなかった。ヒットで一塁にランナーに出ると又バッターボックスに戻って打った。このような場合ランナー一塁と頭に想定しながらゲームを進めた。この運動量は思ったより激しく六十歳の靖夫にとってたいへんだった。靖夫はできるだけいいボールを投げてやった。裕太が打ちやすいように心がけた。まだ小学生ゆえ、空振りすることが多く山なりのゆるいボールでも駄目、適当なスピードでコースが真ん中のいいところでないと打てなかった。それでも「打たせてやりたい」「自信を持たせてやりたい」と一生懸命に投げた。裕太は一度空振りするとあと連続して八回空振りするまで自分が打たしてもらえると瞬時に計算していた。たいへん頭のいい利発な少年だと思った。五回戦の試合は9対2でタイガースが勝った。点数の合計を計算してもらいその差は何点なのか靖夫は意地悪い質問を裕太にした。裕太は即座に「7」と答えた。靖夫は頭を撫でてやった。

それからしばらく七～八米位の高さのフライを投げそれを裕太に受けさせる遊びをした。体に当てながらも三回とることができた。靖夫はボールを投げてみて自分の肩の衰えを実感じた。

一時間少々遊んだところで公園の片隅にある水飲み場で二人は手で洗った。そのとき裕太は公園での秘密の隠し場所を教えてくれた。一番おもしろかったのは遊びを終えて帰る途中「今日は野球を思い切りして遊んだので明日は筋肉痛になるなぁ～」といったことである。

家に着くと宝塚から愛子の義弟健が来ていた。健は三十五年ばかり事務機メーカーに勤めていたがリストラまがいの早期退職で昨年の後半からN商事に就職していた。健は前の会社では営業一筋であった。N商事においても営業を担当しているとのことだった。愛子の立派なところは少人数の会社であり従業員の「やる気」を無くさせないためにも義弟を一社員として雇っていることだった。靖夫も愛子の判断が正しいと思った。健もまたそれが当然であると平気な顔をしている。

業績を上げ社員の信頼を自分の力で勝ち取り是非健にN商事の役員になってもらいたいと思った。間もなくご馳走が並べられ達夫も二階から下りて来て八人によるにぎやかな昼夕兼用の食事が始まった。達夫は落ち着いた口数の少ない青年だった。直樹の法事の時しか会っていなかったので恥ずかしそうだった。達夫はグラスに半分ほどしかビールを入れ口にしなかった。酒はあまり飲めないらしい。健と靖夫は昔話に花を咲かせながら遠慮なく大いに飲んだ。

健、靖夫、喜子は十七時半頃愛子の家を出て夫々の自宅に戻った。

靖夫は後日、「ホテルでの食事が美味しかったこと、夜景が素晴らしかったこと、新築の家が見られたこと、叔父や直樹、亮の仏さん参りができたこと、裕太少年と野球ができたこと」などを記した礼状を愛子に送った。

しかし裕太少年と野球をしたときこの場に「直樹兄さんがおればどんなに喜んだであろう」ということだけはどうしても書けなかった。それが愛子や真知子に対する靖夫のせめてもの気配りだった。

おわり

（二〇〇一年二月十五日）

＊　神戸では海側のことを浜側、山側のことを岡と表現する。